これまでとは違った目で物語を見つめてみよう
―六年「自分の力でゴールを決めろ！」の実践より―

横浜国立大学教育人間科学部附属横浜小学校
茅野　政徳

高学年になると、物語を味わいながら登場人物の心情の移り変わりや考え方などを多面的にとらえるだけでなく、表現や文体に表れた作者の意図や工夫を感じ取り、自分なりの考えをもてるようになる。言い換えれば、客観的視点で物語をとらえ始める時期である。

しかし、テキストの言葉ひとつひとつについて作者の意図や工夫、書きぶりなどを検討したり、テキストの概観について自分の考えを表出したりする学習は、これまであまり行われてこなかったように思う。

そこで、推理小説で謎解き（ゴール）をしたり、物語の最終場面（ゴール）を自分で書き、本物の作品と比較したりする学習を試みた。物語に対して客観的・批評的な立場に立ち、自らの考えを発信する活動は、子どもたちの読みの視点を広げ、読みを深め、作品のすばらしさに気づく有効な手段になり得ると考えたからだ。

作者が紡ぎ出した一言を無駄にしないで読ませたい。活動に必然性があり、自ら進んで考えを友達に伝える意欲が喚起される単元をつくりたい。そう願い、本単元を構想した。

単元のねらい

○物語の最終場面を想像したり批評したり、推理小説の謎を解いたりする目的に向かって、文章中の細かな表現や情景、場面の移り変わり、登場人物に着目して読み深める。

○優れた叙述や作者の意図・工夫を感じ取り、想像を膨らませて読む楽しさを味わう。

学習展開と子どもたちの学び

第一章

言葉の名探偵になり、犯人やうそを見破ろう！

問題編と解答編に分かれている推理小説を用いる。犯人やトリックを見破るために文章の細かな表現や登場人物の言動に着目する。

①単元のめあて（目標）や学習の流れを知る。

②推理小説を読み、文章の言葉を手がかりにして犯人やトリック（ゴール）を決め、その根拠をグループやクラスで話し合う。

参考：少年探偵ブラウン（偕成社　ドナルド・ソボル著）
消えたパンダ金魚事件（仮説社　朝の連続小説　杉山亮著）

「今日の学び」より…学習後の感想

○これまで適当に読んでいたことを実感した。

○文章の言葉ひとつひとつにいろいろな意味があり、大切だとわかった。文章をしっかり読むことはつかれるけど、そのぶんなぞがとけたときの喜びは大きく、楽しい学習になった。

○友達の意見で自分の考えが確かなものになったり変わったりした。一人では、考えも限られてしまうが、人が増えれば増えるほど豊かな学習になると思った。

第二章

物語の最終場面を書き、友達や作者と比べよう！

作家になったつもりで物語の最終場面を書き、友達や作者が書いた最終場面と比べ、話

し合う。想像を膨らませるおもしろさに気づき、細かな表現に着目する必要性を感じ、作者の表現の意図や工夫に対して考えをもつ。

①物語の最終場面前までを読み、自分で最終場面（ゴール）を書き、クラス全体で読みあう。

②記述の根拠を話し合い、作品を手直しする。

③作者の最終場面を、自分や友達の作品と比べ、作者の表現について考えを発表する。

教材：海の光（教育画劇「うみのひかり」緒島英二著）
サーカスのライオン（ポプラ社　川村たかし著　斎藤博之絵）

「今日の学び」より

○作者が文章にちりばめた言葉が最終場面でパズルのピースのようにしっくりおさまったのがすごい。自分で最終場面を書いてみたからこそ気づけたと思う。

○物語に味があるとすると、これまでは一口しか味わわず、かくし味に気づかなかったと思う。友達の作品の中には、かくし味までつかんでいるものがあり、手直しの参考になった。

○作者の最終場面は短かったけれど、少ない言葉が文章のたくさんの言葉を引き出しているように思えた。やはり、作家はすごい！

○物語を読むだけで楽しんでいたけれど、もっと細かい部分に着目すると何倍も想像がふくらみ、楽しめるのだと感じた。

第三章

物語の最終場面に対し、自分の考えを表そう！

これまでの学習を生かし、物語の最終場面を批評的に読み、自らの考えを表す。納得する点や疑問点を出すことで物語の奥深さや作者の力を実感し、新たな読み方を身につける。

①最終場面をどう受け止めたか、文中の言葉を手がかりにしながら考えをまとめる。

②考えをクラス全体で交流し、作者の表現意図や工夫、物語の展開などについて自らの考えの変化や深まりを記述する。

教材：風のゆうれい（リブリオ出版　テリー・ジョーンズ著）
黄色いボール（河出書房新社　立松和平著）

「この学習の学び」より

○これからも作者はなぜこのような書き方をしたのかと考えながら、物語を読みたい。

○注目した言葉によって物語の読み取り方が変わることを学んだ。物語の中にはいろいろな言葉がかくされていて、四十四人みんなの考えを組み合わせることによって、新しい物語を読んでいるように感じ、本当に楽しかった。

○今回の学習を通して、作者はさりげない言葉をちりばめ、読者に対してたくさんのことを考えさせ、想像させてくれると思った。

今後に向けて（成果と課題）

PISA調査の結果が公表され、「読解力」という言葉が盛んに聞かれるようになった。私にとっては、これまでの実践の至らなさを再認識するよい契機となった。そして、従来の読みの指導を踏まえつつ、子どもたちに新たな読みの視点を与え、読みの力を育てたいと思い立ち、試案としてこの単元を構想した。

単元を通して子どもたちが、自らの読書生活をふり返り、ひとつの言葉がどれだけ大切なものなのかを実感し、さらに教室で友達と学ぶからこそ、考えや想像が広がっていくことを体感してくれたことは成果である。しかし、教材や単元構成、目標の明確化など、見直しが必要な点は多い。

これからも子どもたちが能動的にテキストにかかわり、自分事として友達の考えに耳を傾ける。そんな国語教室をつくっていきたい。

かやの　まさのり　横浜国立大学府川源一郎教授・髙木まさき教授に指導を仰ぎながら、微力ではあるが、今年度も読解力の実践研究に励んでいる。
kayano@pm7501.yokosyo.ynu.ac.jp